

「冬のソナタ」論

— その「保守性」と「革新性」をめぐって —

上 野 輝 将

はじめに

周知のように、2003年放映の韓国ドラマ「冬のソナタ」（冬ソナ、原題：「冬の恋歌」）以来、韓国のテレビドラマ・映画から韓国ツアー、韓国文化などへ波及する韓流ブームが日本でおきた。中でもきっかけとなった「冬のソナタ」は、NHKで2003～2004年にかけて地上波、衛星放送で計4回放映され、空前のブームとなった¹。中高年女性の主演男優ペ・ヨンジュンに対する熱狂的な騒動などを揶揄する報道もあったが、ファンの中には、韓国語や韓国文化への関心を持つようになった生真面目な人々も少なくなかった。

この社会現象ともなった「冬ソナ」ブーム、その「冬のソナタ」の魅力とは一体何であったのか？ ファンの声によれば、初恋のテーマ、魅力的な俳優、映像の美しさ（風景）、美しい音楽、セリフのスマートさ等々があがっている。また、識者によると、「韓国色」の薄さや「無国籍」性（音楽、スキー場、リゾート、大都市、建築、インテリア・デザイナーなど）が日本人にアピールしたのだろうと言う。

主として、中高年の日本人女性を念頭に「冬ソナ」の魅力分析が行われるのだが、男性である筆者にとっては、多くの「冬ソナ」言説（その数多さも「冬ソナ」ブームのもたらしたものである）にいずれも満足できなかった。たとえば、上記に言われている、「冬ソナ」の魅力—初恋のテーマ、映像・音楽の美しさや「韓国色」の薄さ等々—は、「冬のソナタ」の監督ユン・ソクホの他の

作品「秋の童話」(2000年)、「夏の香り」(2003年)にも共通した特色であり、「冬ソナ」独自のものではない。

では、なぜ人々は(私も含めて)ドラマ「冬のソナタ」にかくも惹きつけられたのか? また繰り返し見るファンが多いのか? その納得いく答えを、既存の「冬ソナ」論に見出すことができるであろうか? 以下、いくつかの先行研究を検証するが、その前にドラマ「冬のソナタ」の構成と内容を簡単に紹介しておこう。

第1章 ドラマの構成と内容

1 構成

ドラマの構成と制作スタッフは以下の通りである。

①全20話—1話70分程度

第1話：出会い、第2話：はかない恋、第3話：運命の人、第4話：忘れえぬ恋、第5話：罨、第6話：忘却、第7話：冬の嵐、第8話：疑惑、第9話：揺れる心、第10話：決断、第11話：偽り、第12話：10年前の真実、第13話：追憶、第14話：二度目の事故、第15話：過去への旅路、第16話：父の影、第17話：障害、第18話：運命のいたずら、第19話：父と子、第20話：冬の終わり

②製作スタッフ

・演出：ユン・ソクホー1957年生まれ、建国大学卒、1985年 KBS 入社

他の作品：「秋の童話」(2000年)、「冬のソナタ」(2002年)、「夏の香り」(2003年)、「春のワルツ」(2005年、2006年 NHK/BS 放映中) など

・脚本：キム・ウニ (1973年生、漢南大学仏文科、韓国芸術総合学校映像院シナリオ科在学)

ユン・ウンギョン (1974年生、西江大学英文科、同上)

・アドバイザー：オ・スヨン (1968年生、梨花女子大学哲学科、1993年

KBS ドラマ作家になり「秋の童話」などの
脚本を書く)

- ・ 主要キャスト：チョン・ユジン (チェ・ジュウ)、カン・ジュンサン＝
イ・ミニョン (ペ・ヨンジュン)、キム・サンヒョク (パ
ク・ヨンハ)、オ・チェリン (パク・ソルミ)

2 内容要約

或る年の冬、ソウルのエリート高から地方都市春川市^{チュンチョン} (ソウルから東北90 km) の高校に転校してきたカン・ジュンサン (チュンサン)² が、高校2年生の放送部の仲良しグループ—ユジン、サンヒョク、チェリン、ヨングク、チンスクらに混乱と亀裂をもたらす。ユジンとサンヒョクは幼なじみで互いに好意をもっているが、ユジンは影のあるチュンサンに次第に惹きつけられ、チュンサンも次第に心を開いていく。ソウルから父親探しにきたチュンサンは、サンヒョクの父親を実の父ではと疑っていた (そのためサンヒョクに敵意を露わにしていた) が、ユジンの家で見た古い写真のため、ユジンの父こそ自身の父親かもしれないと思い込む。そのためユジンと交わしたクリスマス夜のデートの約束を破り、母親とアメリカに旅立とうとしたが、途中一人でデート場所に急ごうとして「交通事故死」した。

それから10年後、ユジンは設計事務所ポラリスのインテリア・デザイナーとして生き生きと仕事をしている。サンヒョクはユジンの婚約者で、ラジオ局のプロデューサーをしている。雪の降る夜、ユジンはサンヒョクとの婚約式に行く途中、チュンサンに似た男を一瞬見かけ、街中をさ迷い歩き、家族・友人たちが待つ婚約式は流れてしまう。

ユジンが偶然見かけた男は、デザイナーとなったチェリンがパリで知り合った恋人ミニョンであった。ミニョンは「アメリカ育ち」の裕福な青年実業家で、ポラリスの得意先マルシアン (建設設計会社) の新責任者 (理事) としてユジンの前に現れた。ユジンとミニョンはスキー場施設再開発の仕事を共にすることになり、チュンサンそっくりのミニョンとサンヒョクとの間でユジンの心は

ますます揺れていく。

一方、ミニョンの方は、工事現場でユジンが身代わりのケガをしたことなどから誤解がとけ、チェリンから次第にユジンの方に心を惹かれていった。ミニョンは、過去の世界（チュンサンの記憶）へのこだわりをやめ現在を前向きに生きるべきだ、とユジンに熱く迫る。サンヒョクやチェリンのさまざまな策謀や妨害にもかかわらず、また家族や友人の反対にもかかわらず、スキー場でのコンサートの後、ユジンはついにミニョンの求愛を受け入れた。

しかし、サンヒョクが“ハンガー・ストライキ”で入院し、これに動揺したユジンはミニョンの勧めもあって、再びサンヒョクのもとへと戻り、1ヵ月後に結婚式をあげることを決めた。その頃からミニョンは自己の出生の秘密に気づきはじめ、アメリカから帰国していたピアニストの母ミヒを問い詰めた結果、ついに自分がチュンサンであり、事故で記憶を失い、別の記憶を植えつけられミニョンに変身したことを知る。そして、そのことをユジンも知ることになり、二人は再びヨリを戻すかに見えた。

しかし、チュンサン自身の記憶回復は不十分であり、そのことを悲観したチュンサンは、ユジンと別れてミニョンとして生きていくことを決意し、アメリカに帰ろうとする。これに気づいたユジンが街頭で猛然と追いかけようとした時、ユジンを助けようとしたチュンサンは第2の交通事故に巻き込まれた。だがこの事故でチュンサンの記憶がほぼ甦り、ユジンとチュンサンの仲は復活し、やがて互いに結婚の意志を確認しあう。

ところがここで、ユジンの父がチュンサンの父でもあるのではという疑惑が持ち上がり、チュンサンは母ミヒの嘘にも惑わされて思い悩む。ユジンとの結婚式の強行まで試みたが、これを知ったサンヒョクのために失敗する。チュンサンは疑惑をユジンには打ち明けず、海辺の民宿での一夜を最後にユジンをサンヒョクに託し、別れようとする。ユジンは抵抗するが「真相」を知ってあきらめ、二人は二度と会わないことを確認しあった。

しかし、サンヒョクの父の告白で、チュンサンはサンヒョクと兄弟であり、

ユジンとの血縁関係のないことが判明した。これで結婚の障害はなくなったが、チュンサンは交通事故の後遺症で、手術を緊急にしなければ生命の危機もあることがわかった。チュンサンは、二つの秘密をユジンには告げないまま、サンヒョクにユジンのことを託してアメリカに旅立つ。サンヒョクから真相を聞いたユジンが飛行場まで追いかけたが間に合わなかった。

その後まもなく、ユジンはサンヒョクの勧めにもかかわらず、チュンサンがいるニューヨークに向かわず、留学のためパリへ旅立った。3年後に帰国したユジンは、自身が構想した「不可能の家」の雑誌写真をみて、その建物が実際に建っている南の島に行く。するとそこには設計図を描いた後失明したチュンサンがいて、二人は再会し抱擁する。

第2章 「冬のソナタ」論の検証

1 先行研究について

「冬ソナ」論は数多いのであるが、学問的な検証の対象となる議論はそれほど多くはない。以下、その中からいくつかを選んで検討していくことにする。

●直観的「冬ソナ」論

○高野悦子『「冬のソナタ」、そして私と韓国』（高野悦子・山登義明『冬のソナタから考える』岩波ブックレット、2004）

内外の良質の映画を紹介し続けてきた映画評論家高野悦子、その眼の肥えた視点からのメロドラマ「冬ソナ」に対する高い評価は注目すべきであろう。高野は「ヨン様」（ペ・ヨンジュン）への個人的な傾倒を自認しながらも、「冬のソナタ」のヒロイン像に注目する。半世紀前に一世を風靡した、日本のラジオドラマ、映画となった「君の名は」と比較し、ヒロイン像の違いを次のように言う。

「君の名は」も、女性たちは真知子に自分の人生を重ねました。でも同じ自分の人生を重ねる対象であっても、ユジンは今の時代を上手に反映していて、真知子と

は違うタイプの女性です。真知子はまわりの社会環境に流されますが、自立しているユジンは自信を持って自分の信念を貫きます (p. 44)

ユジンは優柔不断で揺れ動くと言われています。しかし、このドラマの設定のよさは、昔のメロドラマとは違ったユジンの意志の強さにあると思います (p. 46)

高野は、ヒロインの主体的な性格を強調する。チュンサン、ミニョンがそれぞれユジンに対して「ポラリス」(北極星)の役割を果たす約束をしたことに関して、「このドラマのなかでポラリスのように動かなかったのは、じつはユジンで、^{はらんばんじょう}波瀾万丈に人生が変わっていたのはミニョン (チュンサン) のほうです」(p. 45-6)と(下線部は筆者、以下同じ)。

高野の「冬ソナ」分析は鋭く本質をついた批評だと思えるが、直観的に把握されたものであり、必ずしも作品分析を詳細に行ったものではない。しかし、筆者にとっては「冬ソナ」論の中では、最も共感し評価できる批評であった。上記の指摘も概ね賛成なのだが、そのことを前提に注文を出すならば、下線部の点に関してより詳しく聞いてみたいところである。

先ず、①ユジンは「今の時代」の何を反映しているのか？ ②「自立」して「意志の強い」ユジンがなぜ「優柔不断」に見えるのか？ ③エンディングまでユジンは「ポラリス」であったか？ ④人々は「強い」ユジン像に感動するのか？

●文化論的「冬ソナ」論

次に、文化論的な「冬ソナ」論に注目したい。韓国映画、韓国ドラマだけでなく社会や思想、文化全般に精通した二人の議論を紹介する。

○小倉紀蔵『韓国ドラマ、愛の方程式』(ポプラ社、2004)

『韓流インパクト—ルック 코리아 と日本の主体化』(講談社、2005)

小倉紀蔵は韓国の思想や哲学研究の専門家であるが、ドラマなどサブカルチュアについても積極的に発言している。小倉は、「冬ソナ」の魅力について、

「韓国性」の希薄さ、言葉の魅力（高級で知的なジャンルの作品）、既視性・雑種性（日本文化の影響等）（小倉 2005）などを指摘する。中でも、小倉が強調するのは、「ポラリスの衝撃」である。

『冬ソナ』ブームが起き始めたとき、このブームのキーワードはあきらかに「ポラリス」だと、私は思った（p. 92）……多くの日本人が、中心がないという不安感を持っていたときに、チュンサンが「僕はポラリスだよ」とつぶやいたのである。『冬のソナタ』は、そのひとことが最も日本の視聴者に効いたのではないかと思う（p. 94）

小倉はまた、登場人物の禁欲主義の意味合いを重視する。

『冬のソナタ』が日本で大ヒットした理由は、登場人物が自分の欲望を徹底的にがまんし、包み隠している、その奥ゆかしさ、純粹さ、崇高さ、というものが美しく見えたからなのです（p. 23）

「冬ソナ」の性格づけについては、次のように言う（小倉 2004）。

「冬のソナタ」の前半は、きわめてロマンチックな物語になっています。都市で自活する自由な男女の恋です。ところが後半に入ると一転して、出生の問題という、一種ベタベタの韓国の伝統的価値観を軸にストーリーが展開するのです。……ですからこのドラマは、最先端の映像美で表現された、古い世界観のドラマともいえます（p. 84）

小倉の議論について。①まず小倉に限らずよく言われるのであるが、「韓国性」の希薄さ、言葉の魅力、雑種性は「冬のソナタ」に限らない。ユン・ソクホ監督の別作「秋の童話」や「夏の香り」とも共通し、それらが「冬ソナ」の魅力の決め手とは言いがたい。②またセリフの「ポラリス」もユン監督作品の初登場ではない。1999年のドラマ「招待」（イ・ヨンエ主演）の男性主人公のセリフで出てきており、その時も「冬ソナ」でも、共に男性主人公は揺れ動き、

不動の「ポラリス」たりえなかった。小倉とは逆に、「冬ソナ」で「最も日本の視聴者に効いた」のは、揺れ動き煩悶するミニョン＝チュンサンの物語であったかもしれない。ともかく③「韓国の伝統的価値観」（韓国性の希薄さと矛盾するのでは？）、「古い世界観のドラマ」がなぜ日本で空前のヒットをよんだのか？ ただ④「登場人物の禁欲主義」の問題は重要な指摘である。

○四方田犬彦『『ヨン様』とは何か―『冬のソナタ』覚書』（『新潮』、2005.7）

四方田犬彦は映画評論家で、韓国やアジアの映画にも詳しい。小倉と同様に、韓国性の希薄さを指摘する。

ここにはほとんどといってよいほど、韓国的な痕跡が存在していない。……画面に映し出されていたのは、むしろ日本の少女漫画と村上春樹が得意とするノスタルジアの光景に近いように思えた（p. 208）

皮肉なことにそのコスモポリタニズムが幸いして、『冬のソナタ』は思いもよらぬ形で日本の中高年の女性たちから絶大な支持を受けることとなった（p. 218）

次に、ヒロイン像（ユジン像）について、辛口の評価を下す。

ユ진을演じているチェジウは、清楚にして可憐、優柔不断で泣いてばかりいる印象を与える。彼女は建築家として知的訓練を受けているが、それほど聡明ではない。だがその愚かしさはメロドラマが要求するものにほかならない（p. 211）

四方田もまた小倉同様、韓国色の薄さを強調するのだが、①日本の少女マンガ・村上春樹・コスモポリタニズムが、なぜ日本のファン、とりわけ中高年女性の絶大な支持につながるのか納得いく説明がない。②ヒロイン像は酷評に近い。ユジンが「優柔不断で泣いてばかりいる」愚かな女性だとして、そのような「聡明ではない」美人は男性向けではあっても、中高年女性にとってはどうか？ 「冬ソナ」の魅力とは、もっぱら愚かなユジンに振りまわされて苦悶する「ヨン様」への同情、共感だけなのか？

●ファン分析の「冬ソナ」論

○林香里『「冬ソナ」にハマった私たち—純愛、涙、マスコミ……そして韓国』（文春新書、2005）

社会学者林香里は、主としてブームの主導的ファン、中高年層の日本人女性にターゲットを定め、その意識分析を行う。「冬ソナ」ファンにとって「冬ソナ」とは何であったか、各種のアンケートやインタビューでファン分析を行った結果、次のような中高年女性に即したドラマ評を下す。

あらゆる意味で、「冬のソナタ」というドラマは安全な娯楽である。ていねいなせりふ、おとぎ話のような美しい風景—これらはファンの日常の心情を害さず、彼女たちの信念を否定することなく、物語の節目節目で「私どもが教わったとおりの」伝統的規範をちりばめている（p. 111-2）

ドラマでは、ペ・ヨンジュン扮するミニョンがヒロイン・ユジンの恋の二股に翻弄されながらも耐え忍び、なおも彼女を愛し……彼は女性を包み込むような父性愛の持主であると同時に、慈愛に満ちた母性愛を合わせもち、しかも不幸な「耐える女」的キャラクターでもあるのだ（p. 114）

ジェンダー・フェミニズムの観点から見ると、このドラマにはフェミニズム運動の成果を反映・踏襲していない、紋切り型の男女のあり方が描かれていると言える。もっともヒロインのユジン（チェ・ジウ）は仕事をもつキャリア・ウーマンではあるが、彼女がキャリアのことで悩んだり、喜んだりする場面のインパクトは少ない。むしろ、彼女はいつも、仕事そっちのけで涙を流したり、旅行に行ったりと気ままな生活をしているように見える（p. 50）

ファン意識の分析というアプローチには独自の意味があり貴重である³。さらに、男性主人公の両性具有的な側面に注目した林の指摘はユニークであり、「ヨン様」ファンの中高年女性の熱狂的支持の説明づけとしてはおもしろい⁴。しかし、林のドラマ評やヒロイン像については不満だ。それは、①小倉や四方田と共通したところ、たとえば「安全」、「伝統的規範」というような保守的イ

メージと「冬ソナ」ブームとの関連づけや、②作品分析で十分裏付けられていないネガティブなヒロイン像だ。そしてこのドラマには、③「フェミニズム運動の成果」は反映していないという新たな論点が付け加えられるが本当か？そこで、フェミニズム系統の「冬ソナ」論に目を移して見よう。

●ジェンダー論的「冬ソナ」論

○城西国際大学ジェンダー・女性学研究所編『ジェンダーで読む〈韓流〉文化の現在』（現代書館、2006a）

○水田宗子・長谷川啓・北田幸恵編『韓流サブカルチュアと女性』（至文堂2006b）

城西国際大学ジェンダー・女性学研究所が主催したシンポジウム「ジェンダーで読む〈韓流〉ブーム—今なぜ『冬のソナタ』か」が行われ、そこでの成果が2冊の本になった。主催者たちの意図は、以下のようなものであった。

メディアの一部には女性視聴者を戯画化して報道する傾向が見られたが、実はこの現象は、アジアの文化に、直接、能動的にコミットメントする新たな女性層の出現として捉えるべきものであることが、今日、明らかになっている。……ドラマ「冬のソナタ」を徹底分析することで、そこからアジアの女性の現在、未来が明らかになるのではないか（「刊行に寄せて」06a p. 5）

シンポジウムの議論は多岐にわたり、興味深い議論が展開されているが、ここではすでに問題としたヒロイン（ユジン）像に絞って検証してみたい。

チュンサンとの間にもはや障害がないことを知った後で、チュンサンをニューヨークに追っていくのではなく、一人でパリに立っていくユジンの姿には、現代女性としての姿が見えます……自分が共同体の人々におかした罪、まればとと共犯者になった罪にたいする罰を自ら背負って、まればとと別れ、一人で共同体を出ていくという筋書き（水田宗子「現代のおとぎ話『冬のソナタ』の物語の構造」（06b p. 107）

「冬のソナタ」論

チュンサンの思いやり、ユジンに真実をあかさず、苦悩から彼女を守るという女性にたいする保護主義は、ユジンを一人前の人間として扱わない物語世界のプリンスのあり方ですが、すべてを知った上でのユジンの選択と決意が、巧みな現代のおとぎ話である「冬のソナタ」を、現実主義的な醒めたりアリズムの視点を持つ観客も共感できる（水田06b p. 107-108）

私はこのユジンに……ものすごく素晴らしい部分と同時に、ひどく平凡な優等生で、世間の価値観の中でしか生きることができない女性をみます。無邪気で、美しく、かわいくて、どこか頼りなくて、自分というものがそんなに強固にあるわけではない。そして大変道徳的ですよ（尾形明子「『冬のソナタ』の女性像を読み解く」06a p. 33）

「冬ソナ」が映像ではなく、一冊の本だったら、ここまで不自然なストーリー展開は無理だったろう。私たちは女主人公のあまりの優柔不断に苛立ち、二人の男が夢中になることに納得しなかったことだろう（尾形「『冬ソナ』の女性像」06b p. 120）

二人の男の間で泣いてばかりいてただ揺れているように見えるけれども、それは、親や婚約者、友人たち、最愛の男を気遣っての優柔不断さであり、共同体と自己の意思（愛の貫徹）の間で揺れる優柔不断さといえよう（長谷川啓「韓流ブームとジェンダー」06b p. 54）

「アジアの文化に、直接、能動的にコミットメントする新たな女性層の出現」に注目するシンポの視座と、論者たちの問題意識には共感を覚えるが、「冬のソナタ」が「徹底分析」され、「アジアの女性の現在、未来が明らかに」なったかどうかは疑問である。それはヒロイン像の理解にかかわってくる。

まず水田は、ユジンが「女性に対する保護主義」を承知の上でチュンサンの後追いをせず、「共同体」の罪や罰を背負って「共同体」を出ていくところに「現代女性としての姿」があると言う。一方、長谷川は、「共同体と自己の意思（愛の貫徹）の間で揺れる優柔不断さ」にユジンの個性を見出す。一見対照的

な見解であるが、ユジンが「共同体」に捉われていると言う点では共通している。個と共同体というテーマはアジアの女性問題のテーマではあろうが、しかし、一体「冬ソナ」でいう「共同体」とは何であろうか？ 先に見たように「韓国性」の希薄さが言われるなか、「共同体」の意味内容や定義もなしに議論するのはあまり生産的ではない。

その点、尾形のユジン像は明快である。「世間の価値観の中で……自分というものがない」、「平凡な優等生」だが、「凡庸で鈍い」、「優柔不断」な女性と、極めてネガティブなイメージの連続である。仮にそのようなヒロイン像だとするならば、「二人の男が夢中になる」のはなぜか？ やはり「愚かな美人」こそ男に好かれるという通俗的な解釈になるのか？ いずれにしても「冬ソナ」の大ヒットは不思議に思えてくるのだが。

●経済学による「冬ソナ」論

○田中秀臣『最後の「冬ソナ」論』（太田出版、2005）

経済学者田中秀臣の「冬ソナ」の「読解」はこうである。「社会的なブームの真因」よりも「なぜ『冬ソナ』がこうも面白く、感動を与える作品であるのか、そしてこの作品世界の多様性と深み、さまざまな暗示的なシーンと隠喩のもつ意味を解明することが本書の主要な関心事といえる」（p. 5）。この「作品世界の多様性と深み」を分析すべきだという田中の提言は大事にしたいところである。しかし彼の意図は達成されたであろうか？ ここでも「ユジン」像に焦点をおいて検討してみよう。

以下の「ユジン」像の指摘には筆者も賛成である。多くの論者がいうユジンの「優柔不断」さなるものへの有効な反論となろう。

純愛の実現の前には、近親相姦は恥ではなく、むしろ一体性を強めるための契機でしかない。こういい切る彼女の姿は、恥を感じて結婚を放棄したチュンサンに比べて格段に迫力がある（p. 46）

ところが、次のような指摘にはただ啞然とするのみである。

ありていにいえば、ユジンはサンヒョクよりもミニョンの『資産』の格差に魅せられたのである（この利己的な愛にとって男性の『資産』が決定的に重要である点……）。これはユジンのもつ二面性—利他的な愛の傾向と利己的な愛の傾向の共存—を証左するものだろう（p. 65）

いったい、「死んだ」と思われたチュンサンを10年間も思い続けた女性が、金銭的欲望の打算的な側面で恋愛行動をとる人物であろうか？ そのような「ユジン」像でこのドラマはなりたつであろうか？ 田中の「利己主義」対「利他主義」の枠組みのアプローチには一定の有効性が認められるが、上記のような「経済学」の図式的解釈はドラマの現実とはかなり遊離した見解であり、「作品世界の深み」に迫っているとは思えない。

2 先行研究の問題点

以上、先行研究を批判的に検討し、それぞれに疑問や難点を指摘した。教えられた点も少なくないが、ここでは、全体に共通した問題点と課題を挙げておきたい。

まず第1に、作品世界の内在的な分析があまりにも少ないということである。先験的枠組分析や社会状況論的説明にとどまらず、徹底したテキスト分析が必要だと思うのである。

第2に、ヒロイン（ユジン）像の相克である。高野を除き、ほとんどの論者がユジンに対し「愚かで優柔不断な」イメージを抱いている。ネガティブなユジン像が優勢なのである。「冬ソナ」ブームが、男性主人公の主演「ヨン様」とペ・ヨンジュンによること大であるとしても、その相手たるヒロインのユジン像があまりに卑小であると、視聴者の感情移入の妨げとなってしまう。ユジン像の正確な検証が求められる。

第3に、全体像の把握が重要である。断片的で恣意的な事実認識ではいけない。とりわけユジンの全体像など、シナリオ分析による実証的な把握が必要だ。

最後に、以上のような作品分析を貫いた上で、「このドラマにはフェミニズ

ム運動の成果を反映・踏襲していない」かどうかなど、韓国社会や時代状況と「冬ソナ」との関係の解明に進むべきであろう。

3 本稿の課題と分析の方法

そこで、本稿の課題と方法についてまとめておきたい。本稿の課題は、作品世界の内在的な分析によるヒロイン（ユジン）像の再構成を通して、何が「冬ソナ」の魅力かを追求することにある。

分析の方法は、ユジン像について、「主体性」と「利他主義」（自己犠牲）の枠組から検証する。その意図は、まず「自立している」のか「優柔不断」なのかをヒロインの「主体性」の側面から確かめてみたい。他方、このドラマでは利己的な人物や振る舞いに対し、「登場人物が自分の欲望を徹底的にがまん」（小倉紀蔵）するという自己犠牲的な行為が描かれている。それを「利他主義」という側面で捉えてみることにする。そして二つの側面がいかなる関係にあり、そこから何が生み出されるかを考えてみたい。

次に、筆者は歴史学を専門としているので、ドラマの進行、物語を展開させる要因に注目する。すなわち、物語の中で、変わるものと変わらないもの、状況を変化させるものと現状を維持しようとするもの、換言すれば「革新的」なものと「保守的」なもの、その両者の具体的な在り様に注目したい。もう少し具体的に言えば、「保守的」とは初恋へのこだわり、過ぎ去らない過去、既存の価値観といったもの、「革新的」とは、初恋の「卒業」、秩序の破壊（現状打破）、新しい価値観といったものである。そしてその両者の関係を明らかにしたい。

以上、2つの座標軸（枠組み）と徹底したシナリオ分析により、「冬ソナ」の魅力の秘密に迫りたいと思う。なお、本稿では、俳優論には言及しない。その理由は「ヨン様」関係などすでに十分過ぎるほど論じられていること、俳優の魅力（個性・演技力）もシナリオによってこそ真に引き出されるものと考えからである。

第3章 ヒロイン（ユジン）像の再構成

まずユジンという女性の人間としての生き方について、他者に依存しない自立した主体性のある人間であるかどうかを、恋愛・仕事・家族・「世間」の4点で詳細分析する（以下、資料としてシナリオから該当するセリフを引用する）⁵。

1 主体性（自立した女性）

*恋愛（「愛する女」として）

転校してきたチュンサンにユジンは次第に心を奪われていく。ユジンの恋人を自負するサンヒョクは焦ってこれを阻止しようとする。放送部員6人が山小屋で一泊した帰りにサンヒョクはユジンに対し、チュンサンに惑わされないようにと迫った（第2話）。

サンヒョク：今朝も君たちが二人でいるのをみた。（悔しそうに）ユジン、君はなんでバカみたいにチュンサンの言うことを信じるんだ？ チュンサンは誰かを本気で好きになるようなやつじゃない。

ユジン：（断固として）私が好きなの……。サンヒョク、私がチュンサンを好きなの。（傍線は筆者、以下同）

切実な表情で語るユジンの姿に衝撃を受け、ただ彼女を見つめることしかできないサンヒョク。（①-2-146）

この場面にユジンという女性の性格がよく表れていると思われる。ユジンはサンヒョクとチュンサンから愛され、ドラマはその三角関係で最後まで推移するのだが、ユジンはただ愛される存在ではない。なによりも愛する女性なのである。この点、日本の往年のラジオドラマ・映画「君の名は」のヒロイン真知子と比較した高野悦子の指摘は正しい。すれ違いのメロドラマということで、「冬ソナ」は「君の名は」の二番せんじだと言う人もいるが、少なくともヒロイン像には主体性の違いがある。後者には半世紀前の日本女性のある種の典型

がある。ついでに言えば、「君の名は」はアメリカ映画「哀愁」（1940年、ヴィヴィアン・リー、ロバート・テイラー主演）に影響を受けたとも言われる。たしかに「哀愁」は戦争という運命に翻弄される美男美女の悲恋もので、すれ違いの連続であった。「君の名は」も「哀愁」もヒロインは愛される女性であり、あくまでも受身の存在であったというのが、今回改めて両作を見た筆者の感想である。

＊仕事（キャリア・ウーマンとして）

次に、ユジンは「いつも、仕事そっちのけで涙を流したり、旅行に行ったりと気ままな生活をしているように見える」（林）と言われるのであるが、果たしてそうか？ もちろんメロドラマ「冬ソナ」は恋愛問題こそがメインであって、仕事にかかわる問題性は低い。しかしながら、ユジンという人間像の形成に仕事の占める役割が低いとは思えない。お転婆娘の高校時代から10年後のユジンは、短髪のジーパン姿でビルの建築現場に立ち現われる。荒くれ男たちと会話を交わし、建築事務所（ポラリス）では眼鏡をかけて設計図をにらんでいるキャリア・ウーマンなのだ。

「冬ソナ」の中で仕事に関連して印象的なシーンがある（第5話）。スキー場の改装工事が始まった当初の宴会で、酒に酔った現場の親方が怒鳴り声で絡んでくる光景である。若い女性が男の仕事にあれこれ指示をするのを快く思わない親方が不満をぶつけるのに対し、ユジンはひるまずこう切り返す。

ユジン：（すっくと立ち上がると）私たちもここでままごと遊びをするつもりはまったくありません。私たちが若いから一緒に仕事をしたくないんでしょうか。それとも女性だからいやなんですか？（②-6-44）

さらに激昂する親方に対し、ユジンは「礼儀知らずなアマは初めてだとおっしゃりたいんですか？」と畳み掛ける。どうやら二人は以前も他の現場でやりあったらしい様子で、親方はそれを思い出したのか機嫌をなおす。そして酒瓶をマイクに振りつきで歌うユジンに一同拍手しながら大いに盛り上がる。この

ユジンと親方の掛け合いを見ながら、「あっけにとられていた」のがミニョンとその部下のキム次長であった。この光景から見えてくるのは、大学の建築学科を卒業したらしいユジンが5、6年間の仕事現場でそれなりに逞しく成長してきたらしい様子であった。

さらにまたこの親方をめぐって、ユジンとミニョンは衝突する。亡くなった妻の命日に泥酔した親方をミニョンは解雇しようとする。ユジンはその撤回を要望するが、ミニョンは冷たく拒絶する。

ミニョン：お酒を飲んで涙を流す。それが死んだ人のためになるのでしょうか？ 私には、自分のさびしさを紛らわそうとしているだけにしか見えませんが

これに対し、ユジンは「理事のような非人間的な方とはこれ以上仕事したくありません」と述べ、次のように言い放つ。

ユジン：すぐ隣で息をしてた人を、ある日突然失ってしまった時の気持……それがどんなものかわかりますか？ 何ひとつ変わらないのに、ただその人だけがいないという気持……それがどういうものか、あなたみたいな人にわかるはずありません。 (②-6-66)

ユジンとミニョンのやり取りには、二人の人生体験が反映している。「死んだ人にとっていちばんいい贈り物は、忘れてあげることです」というミニョンのアメリカ仕込みの「冷たい」合理主義に対して、仕事上の体験に裏打ちされたユジンの人間観は暖かくまた深い。そこには、仕事だけではなく、チュンサンとの恋愛と「死別」という二重の体験があるのであり、薄っぺらな理屈だけのミニョンの合理主義に比して格段に迫力がある。仕事の上司ミニョンに毅然として立ち向かうユジンに、いうところの優柔不断さは微塵もない。

*家族（3人のオモニに対して）

韓国社会では、子の人生の進路決定（進学、就職、結婚）で、親、とりわけ母親（オモニ）の意見や権威は尊重されなければならないといわれる。ユジン

と実母、義理の母になるかもしれない二人の母（サンヒョクの母、チュンサン＝ミニョンの母）、計三人のオモニ（母）に対するやり取りを見ておこう。

—ユジンの母に対して

ユジンの母（ギョンヒ）は、ドラマの最終局面まで一貫してサンヒョクとの結婚をユジンに強く望んでいる。夫の死後二人の娘を育てる上で経済的にも苦勞をしたであろうこの母は、現実主義的な結婚観の持主である。大学教授の息子サンヒョクは幼いころからの知り合いでお気に入りであり、ユジンが婚約も交わした間柄のサンヒョクを捨てミニョンの元に走ることをどうしても許せない（第10話）。

ユジンの母：ユジン、もしかして、あのイ・ミニョンとかいう人のせいなの、どうなのよ。あの人のどこがそんなにいいの？ 十年以上付き合ってきた婚約者を捨てて、母親の心をボロボロにしてまで好きなの？（②-10-342）

母親の厳しい詰問に対し、ついにユジンはサンヒョクを愛していないと母に告げる。その後、サンヒョクとユジンの仲が「回復」するが、（チュンサンであることを認識した）ミニョンの電話でユジンが深夜ミニョンに会いに行こうとした時に、居合わせていた母はすがり付いてこれを阻止する。ユジンは母を振りほどいて外出しようとするが、母が発作で倒れたためにあきらめざるをえなかった（第13話）。

以上のような場面だけでなく全篇を通じて印象深いことは、ユジンがたとえ愛する母（オモニ）の言い付けであってもこれに逆らい、ミニョン＝チュンサンを愛する自己の気持を貫こうとする意志の強さである。

—サンヒョクの母（チヨン）に対して

「私は最初からこの子が気に入らなかったわ」（第8話、②-8-224）というように、サンヒョクの母はユジンのことを快く思っていない。サンヒョクは一人息子で、母と息子はマザコン的關係にあるようであり、家柄上もユジンとの結

婚には乗り気ではなかったのではないか？ それとも母親の感で、ユジンが本当に息子を愛しているのか疑わしく思っていたのかもしれない。しぶしぶ息子の婚約には同意したが、ユジンには冷たい態度であった。しかしサンヒョクの“ハンガーストライキ”事件で態度を一変する。息子の命が危ないと思い、ユジンに息子と結婚するように必死になって哀願する（第10話）。

チヨン：あなたが私のせいで意地を張ってるなら、謝るわ。本当に悪かったわ。だからユジン、サンヒョクを、サンヒョクを助けてあげてちょうだい。サンヒョクの望みどおりにあなたたちが結婚したら同居しなくてもいいし、仕事も続けていいわ。（②-10-358）

だが、ユジンはそれでも動こうとしなかった。

— チュンサン＝ミニョンの母（ミヒ）に対して

ユジンが自己の意志（愛）を貫く場面はチュンサンの母とのやり取りでも見ることができる。ミヒもかつての婚約者を奪った女性（ギョンヒ）の娘であるユジンには反感を隠さない。二度目の交通事故で重傷を負い入院したチュンサンを看病しているユジンに対し、付き添いを止めて帰れと冷たく言い放つ（第14話）。だが、ユジンはひるまない。

ユジン：（断固として）そんなことはできません。私チュンサンから……いえミニョンさんから離れることはできません。十年間、思いつづけた人です。今やっと会えたんです。（③-14-260）

以上のような三人の「オモニ」とのやり取りから見えてくるユジンの人間性は、肉親であれ義理の母であれ、情に流されず自己の思いを貫く精神的な強さであった。

* 「世間」（「世界中」が反対しても）

ユジンの気持がミニョンに傾いていく中、焦ったサンヒョクは大がかりな仕掛けでこれを阻止しようとする。スキー場コンサート事件である。ラジオ局プ

「冬のソナタ」論

ロデューサーであるサンヒョクはミニョンたちの職場であるスキー場で生放送のコンサートを企画し、彼の両親、ユジンの母、友人たちをそこに招待する。コンサート終了後、先輩のディスク・ジョッキーはユジン、サンヒョクをステージにあげ、二人がまもなく結婚することを観客の前で告げるのであった。いわば「世間」を総動員したユジン包囲網である。しかしユジンはこれに屈することなく、家族・友人の前で、サンヒョクとは結婚しないことを告げる（第9話）。これを契機にユジンはミニョンの求愛を受け容れるのだが、ユジンと同居していた親友のチンスクはサンヒョクに気兼ねしてユジンから離れていく。

ドラマの最終局面で、ユジンとチュンサン二人だけの結婚式の強行はサンヒョクによって阻止されるが、ここでのユジンとサンヒョクのやり取りも興味深い（第18話）。

サンヒョク：（カッとなって） どうしてできないんだ！ みんなが反対してるじゃないか。チュンサンのお母さんも君のお母さんも、まわりがみんな反対してることぐらい知ってるだろ！ 二人を祝福してくれる人なんていないんだ！

ユジン： （腹を立てて） 誰も祝福してくれなくてもかまわない。みんなに反対されても、私は平気よ。そんなの、全然悲しくない。世界中のみんなに反対されても……そんなの悲しくないわ。チュンサンさえ私を愛してくれるなら……他の人の祝福なんていない。（④-18-160）

この「世界中のみんなに反対されても」というユジンの言葉は単なる強がりでないことは、先のコンサート事件の例でもわかるであろう。しかしユジンとチュンサンが兄妹関係ではないかと疑われ、それでチュンサンが離れていくにいたって、さしものユジンも別離を受け容れざるをえなくなる。

以上、恋愛・仕事・家族・「世間」という側面からユジンという女性の人間性を垣間見てきた。それらを通して確認できることは、この女性は、肉親の情

や友人関係、上司の権威などに対して、自己の愛を貫くという強い意志、個としての主体性、自立した人間であるということであった。決して優柔不断な人物ではない。

2 「利他主義」(自己犠牲)

しかし、一方、自己中心的で利己的な人物かというところではない。むしろ自己犠牲的、利他主義的な性格の持主である。たしかにその利他主義的なところは、他人には優柔不断に見えるかもしれない。ミニョンが、サンヒョクをとるか自分をとるか決断せよと述べたように(第9話「揺れる心」)。

ミニョン：ユジンさんは他人の気持ちを傷つけまいと自分の気持ちを素直に表せなくて疲れてしまい、まわりの人間もそれに振り回されて疲れてしまう……どうということかわかりますね？

ユジン： 私が優柔不断ということですね

ミニョン：(にこやかに笑って) 悪いと言ってるわけじゃありません。僕はそんなユジンさんの性格も好きだから。でも今はもう少しはっきりさせる必要があると思います。(②-9-281)

ミニョンは単純にユジンを「優柔不断」とか「八方美人」と決めつけているわけではない。利己主義に徹しきれないユジンの心の優しさを認めた上で、決断を迫っているのであり、そこにはミニョンという人物の包容力と自信が伺われる。

ところで、ユジンはコンサート事件の後ミニョンの求愛を受け入れる。これに対し、サンヒョクは捨て身の反撃、“ハンガーストライキ”を決行し、事態を逆転させる。このサンヒョク入院事件(第10話)を例にユジンの利他主義を検証してみよう。

サンヒョクは一種の断食行為で入院し、彼の母や周囲の人々を大混乱に陥らす。母チヨンがあわててユジンに泣きついてきたことはすでに触れた。ユジンの同級生のヨングク(獣医師)も心配してサンヒョクのもとに帰ってくれとユ

ジンに電話で懇願してくる。しかしユジンはここでも動かなかった。心配している様子を見かねたミニョンが無理に病院に連れていき背中を押す。憔悴しきったサンヒョクを目にし、「危険な状態になりかねない」という医者話を聞いた時、さしものユジンもサンヒョクの元に戻らざるをえなかった。

このユジンの「変心」を優柔不断と見るのは酷であろう。自分のせいでサンヒョクが死ぬかもしれないという状況で、ミニョンへの愛を断念せざるをえなかったのである。恋愛というものは、ある意味利己的なものでしょう。しかし自己の幸福のためには他人を犠牲にしても構わないという利己主義には徹しきれない「弱さ」がユジンの性格である。恐らくこのユジンの「弱点」を長いつきあいで熟知していたのがサンヒョクであろう。サンヒョクはヨングクやユジンらには放送局を辞めたように言っておきながら、実は会社には有給休暇をとって入院していたのである（③-11-12）。

しかし、結局サンヒョクのもとに戻ったことも災いしてか、ユジンが優柔不断で揺れ動いているとか二股主義だとかを指摘する論者（林香里）は多い。なぜ主体的で芯の強い女性が優柔不断に見えるのでしょうか？ それは、このドラマでは、ユジンが弱さの表象である、過剰な涙（女優チェ・ジュウは毎回のよう目を目を潤ませ、涙を流す）、小さな嘘（相手を傷つけまいとして）、言葉と行動のウラハラさ（会わないと言いながらすぐ会おうとする）などなどが、人々にそのような印象をあたえるのでしょう。しかし、それはやはり印象批評でしかない。

ユジンがミニョン、サンヒョクに対して二股主義であったかどうかをもう少し突っ込んで分析してみよう。恐らく、以下のユジンのセリフ（第9話「揺れる心」）は非難の的になるだろう。ミニョンから「決断ではなくて放棄」だと批判された言葉である。

ユジン：ミニョンさんのこと好きです……でも……もっと好きになることはできません。ミニョンさんについていけばサンヒョクが気にかかるし、サンヒョ

クについていけばミニョンさんが気にかかるし、どちらの道にもいけないんです。これが私の決断です……私、ミニョンさんにとってもサンヒョクにとっても悪者になりたくないんです。(②-9-257~256)

筆者は、ユジンの「揺れる心」はこの段階では自然なプロセスであったと思う。なぜならサンヒョクとの「10年間」という歳月は重いものであったに違いない。チュンサンの「死後」、大学・社会人生活を経て28才になるまでそれなりに支えとなったのはサンヒョクであったろう。サンヒョクの性格であれば、結婚を早く迫った可能性もあり、ユジンはそれを先延ばししていたのではなかろうか？ 従って、ミニョンに次第に惹きつけられたからとはいえ、あっさりとサンヒョクを捨ててミニョンに乗り換える方がおかしい。

とはいえ、この「10年間」、ユジンはサンヒョクを真に愛するようになったのか？ 筆者は懐疑的である。たとえ彼らが婚約の間柄になったとはいえ、サンヒョクはユジンにとって「愛さなければならない人」(②-8-186)であって恋人ではなかった。そのことは、10年後の婚約式の日、ミニョンを見かけて彷徨^{さまよ}った夜が雄弁に物語っている。直後に書いたチュンサンへの思慕のメモと、保存していた彼の肖像画を燃やす訣別のシーンでも明らかである(第4話)。実はサンヒョクもそれを自覚していた。ホテルでのレイプまがいの行為に失敗した後、ユジンから別れてくれと頼まれた時、サンヒョクは拒否する。「愛してくれなくなたっていい。愛してくれなくてもいいんだ。どうせ今までだって僕の片思いだったじゃないか」(②-9-272)と叫んでいる。

恐らくユジン自身は、「10年間」でサンヒョクを愛するようになったと主観的には思うようになったと思う。それが錯覚であったことがミニョンの登場によって露呈することになった。こうした事実関係から言えることは、ユジンの愛の対象はサンヒョクかミニョンかではありえない。ここでは二股主義は成り立たない。ユジンの心の深層にあったのは、サンヒョクではなく、チュンサンであったからだ。

以上のような文脈からすれば、ユジンは優柔不断ではなく主体的な女性であるが、また利己主義的に振る舞ったり、ドライに過去と訣別できるタイプの女性ではないということである。

ところで、ユジンやミニョンが利他主義的な心の持主であるとしたら、サンヒョクやチェリンはその対極である。自己の思いを貫徹するためにはウソや策謀などあらゆる妨害手段を講じることを厭わない。ただサンヒョクやチェリンは相当な「悪役」を演じるとはいえ、彼らもドラマの最終局面ではユジンとチュンサンに理解を寄せ、また彼らの人間としての弱さや優しさも描かれているので、このドラマ全体は単純な善悪二元論で終わってはいない。しかし、チュンサン＝ミニョンの母、カン・ミヒの場合は、最後まで利己主義的に振舞う役回りであった。かつての恋敵の娘ユジンと自分の息子との結婚をあくまで拒否して、ユジンとチュンサンが兄妹であるかのようなウソをつき通す。息子の幸福よりも自己の怨念を貫くその執念は聴視者には理解しがたいところであろう。

他方、最大の障害であった母のウソが判明したあとも、アッサリと母を許したのがチュンサンであり、ユジンもまたサンヒョクやチェリンのウソがバレても怒らない。このように、ユジンやチュンサンのように心優しく思いやりのある人物、利他主義の人物が主役であるのが「冬ソナ」の特徴であるが、しかし、それは必ずしも「冬ソナ」のみの特徴ではない。キリスト教の影響かもしれないが、韓流ドラマではヒロインやヒーローはそのように形象化される場合が珍しくない。では「冬ソナ」特有の魅力はどこからくるのか？ 結論から言えば、それは主役たちの心の葛藤の強さ、深さからくるものと筆者は仮定したい。

3 葛藤と煩悶

その葛藤とは具体的にどういうものであったか？ まずは、理性と心情（感情、情念）の相克である。サンヒョクを「愛さなければならない」という理性と、チュンサン・ミニョンを「愛している」心情の相克である。これと並行して、過去と現在の相克がオーバーラップして進行する。即ち、過去のチュンサ

ンと現在のチュンサン＝ミニョンとの選択の問題である。換言すれば、ミニョンにとってより困難な敵は、サンヒョクではなくチュンサンであった。皮肉なことに、「生ける」チュンサン＝ミニョンが、「死せる」チュンサンと闘わねばならなかったことである。ここではミニョンはユジンに「熱い合理主義」で迫る。

かつてチュンサン（高校時代）と歩いた湖の散歩道での、ユジンとミニョン二人のやり取り（第7話）は興味深い。

チュンサンの面影を探すようにミニョンを見つめているユジン。ミニョンはそんなユジンを不思議そうに見ているが、自分を見ているのではないのに気づく。

ミニョン：こんなに美しいじゃありませんか。こんなに美しい場所なのに、ユジンさんがここで見たものはなんですか？…… 思い出だけでしょう……ユジンさんこそ、影の国で一人ぼっちで生きているんじゃないじゃありませんか？

(②-7-144～8)

過去の「影の国」から現在の「光の国」への脱出を促がすミニョンの言葉は、ユジンにさらに迫力を持って迫る。

ミニョン：僕のこと、誰かを心から愛したことなどないだろうっていいましたよね？　そうです。僕には愛とはなんなのかよくわからない。でも、僕に言わせれば、その死んだ人をユジンさんが思いつづてるのも愛じゃありません。……それは愛じゃない、執着で、未練で、自己憐憫です！（②

-8-166)

「やめて、どうしてそんなことを言うのですか」と叫ぶユジンに対し、ミニョンは「あなたが好きだから！」と熱く告白するのであった（第8話）。「冷たい合理主義」には凜として言い返すことの出来たユジンも、このミニョンの「熱い合理主義」にはもはや言葉を返せない。こうしてユジンはミニョンの求愛を受け容れていくのである。

では彼らは、過去の世界とは完全に絶縁するのかといえばそうではない。その後、ドラマの後半では、ミニョンはチュンサンであることに気づくのであるが、ユジンはミニョンがチュンサン時代の記憶を取り戻すことを望む。またミニョンはミニョンで、チュンサン時代の自己のアイデンティティ回復を巡って深刻に悩み続ける。そしてそこに出生の秘密がからまってきて、過去と現在はいまますます相克していき、主人公たちの心の悩みと葛藤もさらに深まっていくのである。

この理性と情念の相克による主人公たちの葛藤と煩悶こそが、視聴者の心を揺さぶり感動を呼び起こすのではないかと、筆者は考えている。ユジンとチュンサン＝ミニョンとも誠実で、利他主義的な人物である。これが美男美女であっても、自己中心的でご都合主義的な人物であれば、視聴者は彼らに感情移入してドラマの世界に没入できない。筆者は、二人の主演中、ヒロイン・ユジンの立場に立ってこのドラマを観てきた。男性だからヒロインに魅せられたというつもりはない。ユジンという女性が主体性と他者への思いやり、ひたむきさと謙虚さとを兼ね備えた人物であり、それゆえにさまざまな困難に煩悶し葛藤しながら、そこを乗り越えて行こうとする生き様に感情移入してしまうのである。

もしも多くの論者が言うように、泣いてばかりいて、男や強者に依存するタイプの女性であれば、多くの視聴者は感動するよりもシラケてしまうであろう。あるいは美人の我がまま女だとして、振り回される男たちミニョンやサンヒョクの不甲斐なさが目立ってしまうだろう。熱狂的なファンである日本の多くの中高年女性はどこに感情移入したのであろうか？ ヒロインの人格的魅力があつてこそ、ペアである“ヨン様”の魅力も映えると思う。

ヒーローであるミニョンもまた利他主義の人である。サンヒョク入院事件ではわざわざユジンの背中を押してサンヒョクの元へ連れて行く。

ユジン： サンヒョクの顔を見たら……私、帰ってこられなくなるかもしれませ

ん。(ミニョンを見て) そうしたら、どうしますか……？

ミニョン：(胸を引き裂かれる思いながら) それでもかまいません。ユジンさんが
苦しんでる姿を見るより、ましです。(②-10-367)

このミニョンの言葉には、高度の自己犠牲的精神が現われている。ユジンへの愛ゆえに、ユジンをあきらめるのである。もしもミニョンが苦悩するユジンを平然と傍観していたならば、果たして、ユジンはどうであつたろうか。

ユジンは、「ミニョンさんは私のいちばん大切なものをもっていったから……私謝ろうとは思いません……愛してます」とミニョンに別れを告げるが(第10話、②-10-376))、サンヒョクのもとに戻ったユジンはもはや抜け殻であり、あたかも喪服を着た女性のようにあつた。完全に主体性を放棄した人間であつた。このようなユジンを二股主義とはとうてい言えない。

ユジンはその後、チュンサンに回帰したミニョンのもとへ戻る中、主体性を回復していくが、ミニョンはチュンサンとしての自分探しを始め出すと、その主体性は怪しくなっていく。後述するように、かつてユジンを批判したこととは逆転して、過去の世界にとらわれ「影の国」の住人であるかのように迷走していくのである。このドラマ後半の矛盾した、葛藤し煩悶するミニョン＝チュンサンにも多くのファン、とりわけ中高年女性は引き付けられたかもしれない。

まとめておこう。筆者にとっての「冬ソナ」の秘密はこうである。理性と情念の葛藤は、言い換えれば、主体性と利他主義の葛藤である。自立した意志と思想を持つ人物が自らの欲望を自制しようとする、しかし抑えきれない心情・真情の表出ゆえに、激しく煩悶し、時には矛盾した言動や行為を取ってしまう。だがそれにも関わらず、自己の真実の愛を貫き通そうとする。金と物欲万能の時代には夢物語かもしれないが、これがメロドラマ「冬ソナ」の大きな特徴であり、それが多くの感動を呼んだのではないかということである。

ところで、女性の主体的な生き方を重視するのがフェミニズムの立場だとするならば、本稿で明らかにしたヒロイン像はどうであろうか？ 「このドラマにはフェミニズム運動の成果を反映・踏襲していない、紋切型の男女のあり方が描かれている」（林香里）といった解釈は果たして妥当であったか？ いや問題はヒロインだけでなくドラマ全体なのだ、という意見があるかもしれない。そこで、「冬ソナ」全体の特徴を、フェミニズムやジェンダーの問題に留意しながら検討してみよう。

第4章 「冬のソナタ」における「保守性」と「革新性」

前章の「主体性－利他主義」の枠組みが、主人公たちの内面的な世界に注目したとすれば、本章では、物語の構成や社会的関係性などより外的な側面に視野を広げドラマ全体を分析する。その際、「保守性」と「革新性」という座標軸を立てたい。すでに二章の「分析の方法」で述べたように、ここでの「保守性」、「革新性」とは政治的・思想的な意味合いだけでなく、物語進行の動因や物語世界の秩序維持あるいは破壊にかかわる諸要因として理解していただきたい。また二つの座標軸はそれぞれが、a 物語の構成面、b 男と女の関係性、の二つの分析軸から構成される。

1 「保守性」

a 物語の構成面

高野悦子は、「高校時代の第1話、第2話がよくできていて、ここにドラマのすべての要素がかくされている」（高野 p.33）と述べている。たしかに、「高校時代」はドラマ全体の原型のような位置を占めているように思われる。ユジン・チュンサン・サンヒョク・チェリンの三角関係、四角関係があり、交通事故、出生の秘密がある。10年後はチュンサンがミニョンに変身したとはいえ、ある意味「繰り返し」のような感を与える。

ユジン、チュンサンらの父親世代もまた恋愛の三角関係、四角関係であったから、このドラマは2重に「繰り返し」があり、まるで螺旋的円環構造をなし

ているようでもある。従って、森岡卓司の以下のような解釈もそれなりの根拠を有している。

この物語は、第一話にあらかじめ示された「あるべき」世界へと如何に立ち戻るか、という点に進行の要諦を持つ。従って計一三年の時間経過を有し、婚外子、婚約破棄といった多くの反秩序的なハプニングをも含むこのドラマに支配的なコンセプトは、「成長」や「変化」ではなく、「復帰」や「継続」という、些か保守的なものであると言わねばならないだろうか」（森岡卓司『『冬のソナタ』の出口ー〈兄弟〉というキーワード』、前掲『韓流サブカルチュアと女性』p. 134）

たしかに10年後の第3話以降最終話まで、高校時代のユジンとチュンサンの甘美な思い出の光景が絶えずドラマの中でフラッシュ・バックされ、視聴者もまた自らの青春時代へのノスタルジアをかきたてられるであろう。チュンサンやユジンも過去にこだわるのは止めようと言いながら、記憶回復への執着を捨て去ることはできない。このドラマに「復帰」や「継続」という意味での「保守性」があることは否定しがたい。しかし、では「成長」や「変化」という側面は問題外であろうか？

b 男と女の関係性

次にジェンダー論的な視点で「冬ソナ」の「保守性」を分析してみよう。ここでの「保守性」とは、物事を決定する際の男性の主導性・能動性、女性の副次性・受動性、あるいは保護・被保護関係など伝統的価値観の在り様である。

まず否定できないのは、物語の起動や展開は、高校時代のチュンサン、10年後のミニョンの突然の侵入によって起きる。平穏な人間関係や安定した秩序は男であるチュンサンによって攪乱され破壊されていく。この限り、ユジンの対応は副次的、受動的である。

この秩序破壊の最大の被害者はサンヒョクかもしれない。最終話、チュンサンとの兄弟関係が判明。家庭崩壊の危機でサンヒョクの次の悲憤慷慨はもっともである。

サンヒョク：おまえが現われてから、何もかもがめちゃくちゃだ。僕が持っていたものはすべて、めちゃくちゃになった。……元に戻してくれ。全部、元にもどしてくれ！」(④-20-294)。

だが、ユジンをめぐるサンヒョクとチュンサンの男同士の関係は、ドラマの後半、微妙となる。対立し憎み合う関係からユジンをめぐる理解し合う関係に変化していく。まず、ミニョンは自分がチュンサンだと気づくが記憶が戻らないことに悲観して、アメリカに帰国する決意をし、サンヒョクにユジンを幸せにしてくれと頼む(第13話)。次にユジンがミニョン＝チュンサンと気づき、空港でミニョンに追いつき二人は話し合う。しかし記憶は戻らない。ここでもミニョンはユジンが寝ている間にサンヒョクに電話してユジンを迎えにくるよう頼み、またもアメリカに一人旅立とうとする(第14話)。さらに兄妹関係の疑念が生じると、ユジンには知らせるなどサンヒョクに頼み、ユジンと別れようとする(第18話)。だが最後に、兄妹関係の疑念が解消しサンヒョクとの兄弟関係が発覚したあとも、ユジンには秘匿してサンヒョクに後事を託し、自身の失明か死亡かの重病も伏せたままアメリカへ帰ったのである(第20話)。

ユジンはこのような男同士の取り決めに抗して、ひたむきにミニョン＝チュンサンへの愛を貫こうとする。しかし最後に、アメリカに旅立ったチュンサンの後追いはせずに一人パリ留学に旅立った。「あの海辺での幸せな思い出を最後に、もう会わないで、お互いの笑顔だけを覚えていよう」(④-20-324)というチュンサンの言葉に従って。

以上の経過から見てくる特徴は、重要な情報を最愛のパートナーであるはずのユジンには秘匿したまま、ライバルの男同士でユジンの身の上を相談し決定していることである。それはユジンが信頼できないからではなく、つらい真実をつたえるのは可哀想だという女性への保護者的立場からの故であった。このような男女の構図は韓流ドラマには必ずしも珍しくないことである。「冬ソナ」の場合も、その伝統的価値観、「保守性」は健在であった。次に、「革新性」

の問題に移ろう。

2 「革新性」

a 物語の構成面

森岡のいうように「成長」や「変化」という要素はこのドラマには希薄であろうか？　すでに述べたように、10年後物語が再開する場面では、ユジンは、ジーパン、ヘルメット、短髪、眼鏡、地味な服装といった外見で、働く女性としてさっそうと登場する。大学卒業後建築士あるいはインテリア・デザイナーとして5、6年のキャリアをつんでいる。それによって人間的な成長をとげていることは、第5話の宴会シーンやミニョンとの解雇撤回をめぐるやりとりで明らかであった。そのような成長があつてこそ、女性としてのユジンの魅力がミニョンを次第に惹きつけていくのである。

「繰り返し」の象徴としての2度の交通事故について考えてみよう。物語の展開に重大な影響を与える事故で、同一人物が当事者というかなり不自然な設定ではある。しかし、よく視るとどちらも避けられない宿命ではなく、人為的なミスであった。1度目は、チュンサンがどうしてもユジンに会おうと焦って急ぐ途中に起きた事故であった。2度目は、ユジンが信号もないところで強引に道路を横断しようとし、ミニョンが身代わりとなって起きた事故だった。

ともかく2度目の事故はユジンの猪突猛進のせいとしか言いようがない。なぜ、ユジンは無謀なことをしたか？　記憶が戻らないことに悲観したミニョンはサンヒョクにユジンを託してアメリカに発とうとする場面であった。それに気づいたユジンは、サンヒョクを突き飛ばし、猛然とミニョンを追いかけ、そのため事故は起きた。そして、ミニョンは重傷を負いながらも、チュンサン時代の記憶を回復していく（第14話）。ユジンは1度目の事故でチュンサンを失い、2度目の事故でチュンサンを取り戻したのである。男同士の筋書きをひっくり返し、物語を新たな展開へと変化させたのはユジンの主体的な行動であった。

たしかにチュンサン、ミニョンの登場がドラマを起動させる要因であるが、

ユジンの主体的な対応や行動も、ドラマの新しい展開や変化に能動的な役割を果たしている。「繰り返し」と見える現象の中に、登場人物の主体的な成長や変化を呼び起こす行動があることを見落としてはなるまい。

「冬ソナ」のテーマとよく言われる「初恋」についても見ておく必要がある。ミニョンは、記憶回復がならず最初にアメリカに帰ろうとした時、ユジンにたずねる。

ミニョン：僕を好きだと言ったのは……愛していると言ったのは……僕がチュンサンに似ていたからですか？

ユジン： いいえ、ミニョンさんはミニョンさんだから。それにチュンサンはチュンサンとして。私、二人とも……好きでした。(③-13-201)

ユジンは「初恋」を「卒業」したのである。

b 男と女の関係性

すでに第3章で、ユジンという女性の主体的で自立した性格の一端は明らかにした。ここではジェンダー論的な視点で、伝統的価値観とは異なるユジンの「革新性」についてもう少し述べておこう。

キャリア・ウーマン的なユジンとサンヒョクとの永すぎた交際期間（10年間）は何を意味するだろうか？ 恐らくチュンサンの影だけではなく、両者の価値観の微妙なズレのようなものがあつたかもしれない。そのように思うのは、以下の二人の会話に注目するからである。ユジンとサンヒョクがヨリを戻して二人の結婚話が進みつつあつたとき、サンヒョクが結婚後の二人の外国留学やユジンの母親への結婚支度金の手渡しを相談なしに決定することに、ユジンは不満を洩らす（第12話）。

ユジン： あなたって、ある時にはものすごくやさしくてあたたかい人なんだけど、違う人みたいに思えることがある。私になんの相談もなしに一人で決めて、一人で行動して……ちょっと距離を感じるわ。そういう時

は自分がどうしたらいいかわからなくなるの。

サンヒョク：教えてあげようか？ ただ僕についてくればいいんだよ。僕を信じて
るだろ (③-12-102)

噛み合わない会話は何を意味するか？ サンヒョクにはユジンの思いは届いていない。「善意」ゆえに男性主導を当然と信じて疑わないサンヒョク流の「柔らかな家父長主義」と、自立したユジンの将来は果たしてうまくいくであろうか？

サンヒョクの母とユジンの関係も興味深い。サンヒョクの母が、同居せず仕事も続けてよいから息子のもとに戻ってとユジンに哀願したこともすでに述べた。裏返せば、サンヒョクの母がユジンをずっと好ましく思わなかったのは、キャリア・ウーマン的な「新しい女」への反感も一つの理由であろう。

「世間の価値観の中でしか生きることができない女性」「大変道徳的」(尾形明子)というユジン評があった。そうだろうか？ チュンサンがユジンとの別れを内心決意して民宿に二人でいった夜、ユジンはドキリとするようなことを言う。ミニョンが部屋を二つ取ろうとすると、ユジンは民宿の女主人に「ひとつ！ 夫婦なんです」と言う。部屋に入ると、カメラを取り出し「チュンサン！」と呼びかけて写真を撮り、にっこり笑って、「新婚初夜の記念よ」と言う。チュンサンが顔をこわばらせると、冗談よとまぎらわしたが……。『道徳的』なのはミニョンであろう。

ユジンの大胆さは、近親結婚という最大のタブーも精神的には乗り越えるものであった。兄妹関係という誤解のため二人が公園で別れの言葉を交わす時、ここでもユジンの方がミニョンよりも迫力がある。

ユジン： 今まで愛してきたし、これからもその気持ちはずっと変わらないと思う。それって……いけないこと？ いけないことなの？

ミニョン： いや、いけないことじゃない。

ユジン： そうよ、いけないことじゃないわ。これはいけないことじゃないんだっ

て思うことにするわ。誰になんて言われようと、私たちの愛は恥ずかしいことでもみじめなことでもないんだから。(④-19-255)

総じて「冬ソナ」は性的には極めて抑制的である。キスシーンも数えるほどしかない。ミニョンが婚外子として出生の秘密を持つように、親世代の方が性的に放縦であった。ユジンも、プレーボーイというふれこみのミニョンも「道徳的」である。サンヒョクのレイプ騒動もミニョンへの嫉妬の故であった。しかしユジンという女性は、男中心の伝統的価値観や既存の性道徳、モラル、タブーに対して無批判に従う女性ではなかった。真実の愛を貫くという点では勝気で大変大胆であった。恋敵のチェリンもまたそうである。ユジンとの兄妹関係に悩むチュンサンに対し、「そのまま逃げちゃいなさいよ……何も知らずに出会ったのに、どうしろっていうのよ！」(第19話、④-19-244)と、ユジンとの逃避行を勧める。「道徳的」な男たちに比し、女たちは秩序破壊を恐れず「革新」的である。

3 「冬のソナタ」の矛盾

以上、「冬ソナ」における「保守性」と「革新性」を明らかにしてきた。この二つの性格が「冬ソナ」の特徴であり、それはある意味、矛盾である。その矛盾は主役の二人に体现されている。

まずミニョンである。十年後にチュンサンから姿を変えて登場したミニョンは、繊細で虚無的な高校生チュンサンとは対照的に、茶髪の眼鏡をかけた明るい青年に変貌する。広い肩幅、ゆったりとした物腰、洗練された都会的な男性である。考え方も現世主義、合理主義的であり、恋愛にも積極的だ。例のコンサート事件の後、「もう放しません。どこにも、誰のところにも行かせません。……僕についてきてください」(②-9-308)とユジンをつよく抱きしめるミニョンは「男性性」の象徴である。

しかし、ユジンの愛を得た後は、「僕がずっと同じ場所にいたら、道に迷うことはありませんよね」と「ポラリス」役を自認したにもかかわらず(②-10-

322)、いつしか迷走のミニョンと化していく。記憶喪失による精神的な不安、近親相姦の恐れ等それなりの深刻な理由はあるのだが、つらい真実をユジンと分かち合って二人で話し合い将来を決めようという選択はとろうとしない。すでに述べたように、ドラマの後半（第13話あたりから）、ユジンに「真実」を伏せたままサンヒョクと話をつけて、何度もユジンから離別しようとする。

それは、ユジンを苦しめてはいけない、ユジンのためにという、ミニョンの利他主義の表れなのだが、女性への保護主義でもあり、これまた「男性性」の表れなのだ。しかし奇妙なことに、一人で悩み煩悶し、ユジンに負けずおとらず涙を流すミニョン、耐え忍ぶこのミニョン像は、視聴者から見れば、「女性性」に転化しているかもしれない。「耐える女」的キャラクターという林香里の指摘はあたっている。もはや力強い「男性性」を喪失したミニョン、現在よりも過去にこだわるミニョン。かつてのミニョンでもない、かつてのチュンサンでもない、「第三の男」がそこにいるのである。

孤独で繊細なチュンサン（高校生）、洗練された「男らしい」ミニョン、自己犠牲的に煩悶するチュンサン（「第三の男」）、現状破壊者（「革新性」）と現状逃避者（「保守性」）、これらがすべて同一人物というのが、「冬ソナ」の矛盾である。しかし、これによって、女性ファンは、ユジンだけでなくチュンサン＝ミニョンにも感情移入し、ドラマの世界に浸りきるのではあるまいか？

これが第一の矛盾とすれば、第二の矛盾は、ユジン像の問題である。これまで詳しく検証してきたように、ユジンは「革新性」の象徴的存在であり、「保守性」のしがらみとの間で煩悶しながらも「革新性」を貫こうとしている。主体性と利他主義との間で苦しみながらも、主体性を保持している。そこに、ユジンという女性像の魅力があったと思うのである。

ところが、ドラマの結末は、このユジン像を解体して終わる。ある論者は、「チュンサンとの間にもはや障害がないことを知った後で、チュンサンをニューヨークに追っていくのではなく、一人でパリに立っていくユジンの姿には、現代女性としての姿が見えます」（水田宗子）というが、筆者はまったく

正反対の意見である。「現代女性」ユジンは主体性や「革新性」を喪失した別人格（「古い女」？）になったと思う。

そもそもユジンの無謀な行動によって、チュンサンが二度目の交通事故で重症となり、その後遺症で生きるか死ぬか、失明するかの瀬戸際にあるのだ。恋人関係ならずとも駆けつけて看病するか、看取るのが常識であろう。しかし、「もう二度と会わないことにしよう」というチュンサンの声が脳裏に甦^{よみがえ}る中、サンヒョクが渡してくれたニューヨーク行きの航空券を捨てて、ユジンは一人平然と（「葛藤」の消滅？）パリ行きの飛行機にのり、3年間のフランス留学に向かうのであった。

一体ユジンという女性は、チュンサンの生死を確かめもせず、安穩と外国で留学ができる人物であろうか？ かつて高校時代チュンサンとユジンはこういう会話を交わしたことがある。

チュンサン：例えば、二度と会わないって決心したら、会いたくてもがまんする？

それとも、もう一度会う？

ユジン： たぶん、私だったら、もう一度会おうとすると思う。

チュンサン：どうして？

ユジン： 会いたって気持ちに理由はないでしょ？（①-2-101）

「死んだ」と聞いてなお10年も思い続けた女性、婚約式もよそにチュンサンの面影を求め夜の街を彷徨った女性、倒れかかる材木から身を挺してミニヨンを救おうとした女性、二度目の交通事故でミニヨンの看病をその母に逆らってやり通した女性、その生き方と行動とにパリ留学は整合するであろうか？

自己の死や失明はユジンに重荷を背負わせるからあえて告げずに別れようというのがチュンサンの利他主義であり、これはこれで理解できることである。しかし、その利他主義や自己犠牲的行為をそのまま受け入れたとしたら、ユジンの人間性はどうなるのであろうか……ユジンの利他主義は？ ユジンの主体性は？ これらを喪失したのでは、ユジンはユジンであって、もはやユジンで

はない。

エピローグでは、3年間の留学から帰国したユジンと、アメリカでの手術で(?)失明したチュンサンが同じ頃帰国する。美しい南の島の「不可能の家」で再会し、二人の恋愛成就を暗示しドラマは静けさのうちに終幕となる。

ドラマ「冬ソナ」の終わり方は、筆者にとっては、あまりに不自然で不満と失望を残す結末であった。しかし、この「保守性」に傾斜した終わり方は、日本のファン（とりわけ中高年女性）にとっては、より安心感をもって受容できるものとなったのかもしれない。筆者が最初予想した筋書き—たとえば、ユジンがかけつけたニューヨークの病院でチュンサンが息を引き取る、あるいは回復するが失明する—では、メロドラマとして悲劇性が強すぎるというのが製作側の判断なのであろう。

ともかくドラマ後半は「革新」的なユジンと、「保守」に転換していったミニョン＝チュンサン、最後に「保守」に転向するユジンとなる。ドラマの中では「保守性」、「革新性」の両面が並存しているが、それぞれが徹底的に相克し、対立しあうわけでは必ずしもない。現状を主体的に打開しチュンサンへの愛を貫こうとするユジン、自己を犠牲にしてもユジンを守ろうとし現状破壊から現状逃避になるチュンサン、この主役二人の波瀾に富んだ関係が、あまりにドラマチックな大悲劇に終わらず、チュンサンの失明というそれなりの犠牲を払って静謐に終焉する。その波瀾性と不徹底性の程よいところが、メロドラマ「冬ソナ」が日本で大成功する要因であったのだろう。

以上、これまで、主体性—利他主義（第3章）、「保守性」—「革新性」（第4章）という二つの座標軸で「冬のソナタ」を詳細分析してきた。それによって、なぜ「冬ソナ」が人々を惹き付けるのか、その「秘密」の一端を明らかにしたつもりである。ところで、「冬ソナ」には、「フェミニズム運動の成果を反映・踏襲していない」（林香里）という意見があったが、最後にその点を検証しておこう。

第5章 「冬のソナタ」とフェミニズム

1 「冬のソナタ」とフェミニズムは無関係か？

筆者の韓国ドラマ歴はまだ浅く、鑑賞した作品は決して多くない。その限りでの感想であるが、「自己主張する働く女性」像とでもいうような作品が最近台頭してきているように思われる。「仕事も恋も」どちらもひたむきにがんばるというTVドラマである。

たとえば、「グッキ」(1999)、「冬のソナタ」(2002)、「宮廷女官チャングムの誓い」(2003～4)などがそうであり、韓国でも日本でも高視聴率を獲得している。最新の傾向として、「屋根部屋のネコ」(2003)、「威風堂々な彼女」(2003)、「パリの恋人」(2004)、「私の名前はキム・サムスン」(2005)、「頑張れ！クムソン」(2005)などは、さほど美人でない女性、ハンディ持ち（高学歴でない、豊かでない、子連れ、肥満、30才以上……）、しかし、明るい性格、逞しい生活力、自己主張の強さ、男の頼りなさなどで共通する。

このようなドラマ製作の背景には、美人ではないがハンサムな金持の男性と結ばれたいという女性視聴者たちの成功願望があると思われるが、働く女性の増大とそれを応援しようという社会傾向の表れともみられる。視聴率に敏感なテレビドラマはそのような社会の雰囲気を書す鏡でもある。

「冬ソナ」は美男・美女のメロドラマではあるが、すでに見てきたように「自己主張する働く女性」としてのヒロイン像がそれなりに描かれていた。そこに、フェミニズムや女性運動の思想、考え方の影響を見るのは間違いであろうか？

脚本家や監督の思想はどうであろうか？

「冬ソナ」製作に起用された、無名の若い二人の女性脚本家、キム・ウニ、ユン・ウンギョンは、当時28～29才であった。「冬ソナ」は彼女たちの持ち込んだ企画であった。脚本家たちがフェミニストであるかどうかはわからない。彼女たちの著作『もうひとつの冬のソナターチュンサンとユジンのそれから—』（ワニブックス、2004）は、ドラマのシーンごとの解説と製作秘話などを

明らかにし、巻末に「冬ソナ」の短い続編をのせている。彼女たちはフェミニズムへのスタンスについては明確に語ってはいない。

「冬ソナ」には、もう一人女性の脚本家がアドバイザーとして存在した。当時30代半ばのオ・スヨンで、彼女はユン・ソクホ監督の前作で大ヒットした「秋の童話」の脚本を書き、ユン監督の頼みで途中から「冬ソナ」の脚本の応援に入った。ストーリーづくりでアドバイスをし、肉付けはキム、ユンの二人が行ったようである。オ・スヨンも「秋の童話」で見るかぎり、フェミニズムの傾向がさしてあるようには思えない（但しデビュー作「PaPa パパ」(1996)ではキャリア・ウーマンのヒロインを描いている）。彼女もまた、自著『冬のソナタ―新しい物語―』（TOKIMEKI パブリッシング、2005）では、その種の発言はしていない。ならば、「冬ソナ」はフェミニズムとはやはり無関係であろうか？

監督ユン・ソクホの存在に注目しなければならない。キム、ユンを脚本家に登用した演出家ユン・ソクホの思想はどうであったか？ 彼はその著作『冬のソナタは終わらない』（廣済堂出版、2005）や、『冬のソナタ秘密日記』（TOKIMEKI パブリッシング、2005）で、「冬ソナ」演出のねらいやエピソード、ドラマ観など、製作の舞台裏を詳しく語っている。監督と脚本家双方の話から確認できる共通点は、以下の2点であった。

- ①ストーリー・セリフは脚本家と監督の共同作業である。脚本家は監督の意見を聞いて修正を重ね、シナリオ完成は徹夜してギリギリ撮影前日というのも珍しくなかった。また撮影現場で監督がセリフを変える場合もあった。
- ②「脚本家の最初のアイデア」（ユン監督）、「当初の企画案」（キム、ユン）では、「冬ソナ」の終幕は「チュンサンの死」で終わる予定であった。このアイデアにはユン監督が難色を示した。その理由は、前作の「秋の童話」で主役の男女が死ぬので、今回は避けたいというものであった。監督によれば、ドラマ進行中も脚本家と「なかなか意見が合わず」悩んだが、ギリギリになり脚本家の方からチュンサンの「失明」案が提示され、それに彼

ものったということである。

韓流ドラマでは、ファンの要望（「ハッピーエンドにして！」など）でストーリーの展開を修正することは珍しくない。「冬ソナ」でもそれは無いとは言えまいが、筆者の推測では、脚本家は作品それ自体の一貫性や芸術性を重視するのに対し、監督の場合はこれまでの自作ドラマとの兼ね合いや批評（マンネリ論）、ファンの反応を気にしたのであろう。フィナーレは妥協の産物であった。

ところで、脚本家とは親子ほど年令が違う監督ユン・ソクホは、「私が撮りたいのはラブファンタジー」であって、韓国の深刻な社会問題（階級、貧富の差、政治、宗教、地域対立等）は大きなテーマとして扱わないようにしていると、自己のドラマ観を述べている。大変興味深いのは彼が語るドラマの女性観である。少し長くなるが引用したい。

日本の女性は、私がドラマに登場させるようなタイプの女性をととても支持してくれるのですが、じつは韓国の女性には嫌われてしまうんですよ。なぜかという、私のドラマに出てくる女性は、男の目から見た理想の女性であって、男にとって都合のいい女性像が描かれているから、というのです。……

韓国では、私のドラマ自体も、女性が男性を選ぶ立場ではなく、男性に選ばれる立場として描かれている、と批判的に受け止める向きもあるようです。そして男性が選ぶのは弱くて控えめな女性だ、と。現代的なフェミニズムを善しとする現代の韓国女性にとっては、私の描くドラマの世界はあまりにも男性中心的だ、というわけです。たしかにそうかもしれません……でも私自身が好きなのはそういう受け身の、女性らしい女性なんですよ……（『冬のソナタは終わらない。』p. 29-31）

要約すれば、ユン・ソクホのドラマは、「男にとって都合のいい女性像」が描かれ、「現代的なフェミニズムの韓国女性」からは支持されない。でも監督自身は「受身の、女性らしい女性」が好きなのだと。

筆者は、この正直で率直なユン監督の自己評価に好感を持つ。実際、彼の作品―「秋の童話」、「夏の香り」など好評を博したドラマのヒロインは、「女性

が男性を選ぶ立場ではなく、男性に選ばれる立場」で描かれていたように思う⁶。もちろん、恋愛は愛し愛される関係でなりたつが、ユン作品では受身の愛される女性こそがそのヒロイン像の主要な側面である。ユン監督はいわゆる保守主義者ではないとしても、彼の女性観は保守的であろう。

では「冬ソナ」のヒロイン像はどうか？　すでに引用したように、「サンヒョク、私がチュンサンを好きなの」と、断固としてサンヒョクの中傷をはねのけたユジンは、やはり愛する女性であった。主体性を持って愛を貫くユジンの生き方や振る舞いについてはドラマの全体像で詳しく分析したところである。最終場面でのユジンの行動は不可解であったが、もしも脚本家の当初の構想どおりであれば、一貫したヒロイン像でドラマはよりドラマチックに終わったであろうと、筆者は思う。

「冬ソナ」はフェミニズムを主張するドラマではないし、フェミニズムを基調とするドラマでもない。監督の女性観にも明らかなように、伝統的な価値観と「保守性」は否定できない。しかし、一方、フェミニズム的な「革新性」の側面もかなり内包したドラマであった。その「フェミニズム的」なものは、若い女性の脚本家が時代から受け止めた感性によるものであり、その「若さ」の勢いが出たのではないかと、筆者は推測している。フェミニストではなくともフェミニズムやジェンダー思想の影響を受けることはありうる。では、その「時代」とはどういう時代であったか？　現代韓国の歴史を、女性の問題を中心に概観しておこう。

2 韓国社会のダイナミズムと「ジェンダー主流化」

かつて軍事独裁政権とか開発独裁国家などといわれた韓国は、1987年「民主化宣言」（大統領直接選挙制の実施など）以後、1993年金泳三文民政権、1998年金大中野党政権、2003年盧武鉉政権（軍事独裁政権下に民主化運動を担った人々が多数参加）と、政治の民主化が急速に進んだ。

この間、韓国経済は1960年代以降急速な発展をとげ、1997年の深刻な通貨危機を乗り越えてさらに高度の発展を遂げ、先進国化の段階に入りつつある。社

会も高学歴化、中間層の増大、都市化の進展などで市民社会の活性化も進んでいる。しかし一方、貧富の格差増大、失業問題、環境問題その他多様な社会問題も噴出し、労働運動、学生運動、女性運動、市民運動など社会運動の影響力も増大する。

こうした社会状況の中で、女性をめぐる社会的変化も顕著である。春木育美『現代韓国と女性』（新幹社、2006）によれば、未婚率の上昇（25～29才女性：1980年14.1%→2000年40.1%）、晩婚化（平均初婚年令：1990年男性27.8才、女性24.8才→2004年男30.6才、女27.5才）、少子化（出生率：1990年1.59→2005年1.08）など、日本と同等、あるいはそれ以上のスピードで進行している。

離婚や再婚の増大もそうだ。2004年の離婚率：2.9（人口千対）、日本2.08（2005年）。離婚に対する考え方は男性より女性の方が10%ほどより肯定的である。女性の高学歴化も日本以上に進行している（高卒の大学進学率：2004年82.1%、女性の大学進学率：1990年31.9%→2005年80.4%）。

働く女性についてはどうか？ 女性の労働力率は高学歴ほど高くなっている（2002年高卒53.7%、専門大学卒87.6%、4年生大学卒82.9%）。しかし、高学歴の方が離職率も高い。韓国女性全体の労働力率は半数程度で（1995年48.4%→2004年49.8%で低い）、就業意識も高まっているが（「家庭に関係なく働く」1991年16.7%→2002年40.2%）、結婚後も働き続けた女性の49.9%は第1子出産前後に仕事を辞めている（2005年）。

全体的な特徴として、女性をめぐる指標は、先進国化の諸現象—晩婚・少子化・離婚・高学歴など共通しているが、欧米に比べて仕事・家庭・育児など、日本の女性と同じく働く女性の負担は重い。そして「女性の意思決定機関への進出は非常に低調である」し、「男性が支配する社会、女性が支配する家庭」という二分法はなお健在だと言われる（趙惠貞『韓国社会とジェンダー』法政大学出版会、2002）。女性の社会的地位はまだ低いのだ。

しかし社会的不平等を克服していく女性運動は活発である。1970年代に女性労働者運動が先駆的に切りひらき、70年代後半から西欧の女性学が流入する

(77年梨花女子大学学部課程に女性学講座、82年修士課程に、90年博士課程)。それらが土台となって、1980年代にはフェミニズム的女性団体が結成され、家父長的支配からの解放の女性運動を進める(87年「韓国女性団体連合」結成)。1990年代の女性運動は「飛躍的な10年」といわれるように運動も多様化し、質的、量的に発展する。注目すべきは、政治参加運動であり、以下の女性政策の年表にもあるように、韓国女性の地位向上や現実の政治過程にも影響を与えつつある。

1983年：女性政策審議委員会、韓国女性開発院設立 1984年：国連女子差別撤廃条約「批准」 1987年：男女雇用平等法制定 1993年：元日本軍「慰安婦」に対する支援法制定 1994年：性暴力特別法 1995年：女性発展基本法制定（女性政策に関する基本法） 1998年：家庭内暴力に関する特別法 2000年：国会議員、市会議員比例代表クォーター制導入 2001年：金大中大統領、女性部新設 2005年：女性部が女性家族部に拡大再編、戸主制廃止の民法改正成立 2006年：韓明淑（ハン・ミョンスク）初代女性首相

以上、「上からの改革」という問題性や制度化に対する意識改革の遅れなど課題はまだまだ大きいものがあるが、韓国の女性運動は社会構造の変化に沿って着実に前進をとげてきている。1990年代から2000年代にかけて、「フェミニズムが制度化され、ジェンダーの主流化が進んだ」と言われる段階に至っている（船橋邦子「韓国のフェミニズム（女性主義）」『韓流サブカルチャーと女性』）。

ところで、「冬ソナ」の脚本家たちが大学に入学したのは、90年代の初め文民政権発足の頃であった。その後の彼女らの10年間は「ジェンダー主流化」過程と重なる。彼女らがフェミニズムやジェンダー論の影響を受けたであろうことは十分考えられる。脚本家も時代の子である。「冬ソナ」もまた、監督と脚本家の妥協の産物とはいえ、フェミニズムの影響をそれなりに受けているとい

うのが筆者の見解である。

しかし、韓国社会に根強い儒教的家父長制は女性運動によって次第に弱体化しつつあるとはいえ、なお社会構造においては根強いようだ。男女間の意識のギャップはそう簡単には埋まらない。離婚の増大はそのことの反映であろう。女性運動やフェミニズムも高学歴の女性エリート中心に展開されてきて、草の根の段階にさらに浸透するのは今後の課題であろう。

さて、ユン監督の作品は日本とは違い、韓国では「冬ソナ」よりも「秋の童話」の方が大ヒットした⁷。「冬ソナ」は並のヒットであった。従って、ユン監督のいう「現代的なフェミニズムを善しとする現代の韓国女性」とは未だ韓国の多数派ではない。しかし韓国のフェミニズムや女性運動には、現代の思潮をリードし影響力を増大する思想的パワーを感じさせる。その点は、ジェンダーフリー・バッシングが吹き荒れ、男女平等規程の憲法24条の改悪さえ取り沙汰される日本とは大きな違いがある。

恐らく日本では、「冬ソナ」とフェミニズムを関連づけて考える人は極めて少ないであろう。フェミニズムや現代思想とは無縁のメロドラマとして観賞するのが普通であろう。それはそれで良いと思うが、筆者は、“冬ソナ現象”とまで言われたこのドラマの魅力分析に、フェミニズムの問題を抜きに語ることはできないと考えた。たとえ通俗的なメロドラマであっても、今日の韓国ではフェミニズムなどの社会思想がそれなりに影響力を及ぼすことがありうることを実感した。そして、その影響が「冬ソナ」の魅力の構成要素の一つであることを本稿は主張するものである。

結びにかえて

辞書（『広辞苑』）によれば、メロドラマとは「波瀾に富む感傷的な通俗恋愛劇」である。「冬のソナタ」はまさにメロドラマである。あまり芸術性が高いとは言えないであろう。つじつまの合わないことやご都合主義、無理な設定な

どアラを探せばキリがない。しかし、我ながらどうしてここまで惹きつけられたのか？ それが出発点であった。

自己分析の結果、ドラマの主人公たちが、恋愛や人生をひたむきに、誠実に生きようとしていること、そこから様ざまに葛藤が生まれること、その葛藤の深さこそが視聴者の感情移入を誘うのではないかと。とりわけヒロインの気丈さと思いやり、その葛藤が私たちがドラマの世界に引き込む鍵ではないかと思うようになった。

本格的に「冬ソナ」分析を考えるようになったのは、終幕の納得いかない終わり方への疑問であった。なぜ、ユジンとチュンサンは三年間も別れ別れにならねばならないのか？ なぜユジンはチュンサンを放置して平然とパリに留学するのか、これではヒロインが別人になってしまうではないか？ この疑問に答えるまともな評論がなかったため、自ら全体像を徹底分析しようということになったのである。

歴史学を専門とする筆者にとって、最近まで韓流ドラマはまったく無縁の世界であった。たまたま NHK の DVD（各話10分程短縮）を観て俗にハマッタのであるが、その後完全版などを繰り返し観賞することになった。さらに他の韓流ドラマを観ていく中、メロドラマ以外にも、社会派ドラマ、コメディ系統、時代劇など非常に優れた作品に接した。そしてそれらを生み出す韓国の文化、社会状況へとさらに関心が深まり、参考文献を買い求め、ついに論文執筆に踏み出したのである。

筆者は一歴史研究者であり、メロドラマ論や文学理論など芸術論にはまったく不案内である。自分の考えが的外れの議論になっているのではという不安もあった。その点、高野悦子の「冬のソナタ」論には勇気づけられた。高野は、「冬ソナ」に夢中になり、「なんでこんなに自分が惹かれるのかが気になりはじめ、他の人に抗弁するためにも理論武装しておこうと思い、いろいろなことを調べはじめました」（前掲文献 p.37）と述べている。「冬ソナ」論への動機は筆者と同じであり、その議論が本稿の出発点ともなっている。

高野に対して「直感的」という評価は失礼にあたるが、筆者は、鋭く本質をついた高野の指摘を、より具体的な論点で発展させ、また実証的に証明する必要性を感じた。本稿はその課題をある程度果たしたのではないかと自負している。

ただ、意見が異なるのは、「あのエンディング」である。高野はチュンサンは「死んではならないですね」(p. 47)という理由でエンディングを支持する。筆者も何かなんでも「チュンサン死ぬべし」とは必ずしも思わない。しかしユジン像が解体されてしまう結末に強い違和感を覚え問題とした。筆者の見解は、高野の描くユジン像（個としての自立性・主体性）から必然的に導き出される帰結であったのだ。

所詮「冬ソナ」はメロドラマであろう。しかし、たかがメロドラマ、されどメロドラマである。筆者は、そのメロドラマに（たとえ欠陥や矛盾があろうとも）、深く感動したが故にこだわらざるをえなかった。その結果、本稿が「作品世界の多様性と深み」（田中秀臣）なるものにどこまで迫りえたかどうかは他者の批判をまつ以外にない。

最後に、筆者は日本近現代史を専攻しているので、韓国や中国との歴史問題や政治問題には深い関心を持っているが、現代韓国や現代中国の文化・芸術については疎かった。「冬ソナ」を契機にドラマから映画、さらには文化状況全般へと関心は広がりつつある⁸。大げさに言えば、「アジアの再発見」とでもいった感じなのである。

その意味では、「アジアの文化に、直接、能動的にコミットメントする新たな女性層の出現」（『〈韓流文化〉の現在』）といわれる現象は、よく理解できる。東アジアでは今、政治はともかく、ますます密接になる経済関係だけでなく、共通の文化圏が形成されつつあるということが実感される。「冬のソナタ」の大ヒットはその象徴的な指標であったと思う。もちろん、爆発的にヒットした日本、それほどでもなかった韓国というように、各国で文化現象は一様ではなからう。逆に、そこからそれぞれの社会や文化の個性、特徴が国ごとに浮かび

上がってくるかもしれない。

そして、それが「アジアの女性の現在、未来が明らかになる」（『韓国サブカルチャーと女性』）ことにどう関連したものであるかは、他のドラマ作品、映画作品等とともに、また日本の作品とも比較して、歴史や社会の奥深くまでさらに掘り下げて追求されるべき課題であろう。

注

- 1 2007年1月から民放のABCテレビでも放映されている。
- 2 韓国語では、フルネームの場合、名前が濁音になって発音する場合がある。本稿では、姓名カン・ジュンサンを、名前だけの場合、チュンサンに統一する。
- 3 ファン意識の分析としては、毛利嘉孝『『冬のソナタ』と能動的ファンの文化実践』（『日式韓流—「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在』（せりか書房、2004）もある。
- 4 ミニョンの両性具有性について指摘したものには、他に信田さよ子「ヨン様は日本の家族の救世主だ」（『論座』2005.4）がある。
- 5 シナリオはキム・ウニ、ユン・ウンギョン、根本理恵訳『冬のソナタ完全版』1～4（ヴィレッジブックス、2004）を使用する。文中、例えば（①-2-146）となっている場合、①は『冬のソナタ完全版』の第1分冊、中央の数字2は第2話、右端の数字146は頁。
- 6 「冬ソナ」の翌年、次作「夏の香り」はユン監督とキム・ウニ、ユン・ウンギョンの同一コンビで製作された。「夏の香り」のヒロインは監督好みの受身の女性でフェミニズム的色彩はあまりない。ここでは、脚本家よりも監督の方が主導権をとったのであろう。
- 7 「秋の童話」の大ヒットは、ソン・スンホン、ウォンビンという二大若手男性俳優の競演も大きな要因であろう。
- 8 たとえば、韓国映画「八月のクリスマス」（ホ・ジノ監督、1998年）、中国映画「初恋のきた道」（チャン・イーモウ監督、2000年）などを観て、その芸術性の高さに感動し、驚きもした。

付記：本稿は、2006年10月25日、本学教員有志の「ジェンダー研究会」での報告をもとに文章化したものである。当日貴重なご意見を頂いた方々に感謝の意を表したい。

Summary

An Analytic Note on *Winter Sonata*

— From a Viewpoint of the Relationship between the Conservative and the Progressive —

UENO Terumasa

In 2003, Korean TV Drama *Winter Sonata* made a big hit in Japan, especially with middle-aged women. The audience were fascinated by a feeling of first love, beautiful music and enchanting scenes, a sense of cosmopolitanism, and the actor *Yonsama*.

In contrast, many critics argue that the heroine *Yujin* is a woman of indecisive and selfish personality. Is this true? A close analysis of the scenario will prove it otherwise.

It is that *Yujin* is portrayed as an independent and altruistic woman. This is why she goes through a psychological conflict, torn with anguish between two men. This is also the case with the hero *Minyon=Chyunsan*, who is distressed about his identity and altruism.

Thus the story of ups and downs has attracted so many TV fans.

Seen from a viewpoint of the relationship between the conservative and the progressive, this drama is produced under some influence of Korean feminism. It seems that this has made *Winter Sonata* more than a simple melodrama.

The difference of opinion between the scenario writers (two young women) and the director, however, have kept the drama going within a moderate range of feministic influence. In consequence, this has led *Winter Sonata* to achieve even a greater success in Japan.